

# 十八世紀小説とリアリズム —ノートI

山 本 和 平

## 1

従来 Fielding にたいしては、イギリス・リアリズム小説の父としての肯定的評価がなされてきた。「小説」という文学形式の定礎者としての、「ロマンス」流行にとどめをさしたあのセルバンテスに比すべき彼の役割が、高く評価されてきたわけである。

そのことはむしろ Fielding 自身、はっきり自覚していた。「ロマンス」を否定して「リアリズム」を創作の指導的理念としようという方法意識はその作品のいたるところに明確に表われている。たとえば “Truth distinguishes our writing from those idle romances...” (*Tom Jones*, Bk. IV, ch. 1)

新しい批評家、Arnold Kettle も、その優れた小説論のなかで「小説」の発生源を「リアリズム」と「ロマンス」の対比のなかで詳細に論じているが<sup>1)</sup>、そしてまたこうした対比のなかに「小説」の本質を探るのは、セルバンテスのなかに小説の原初形態をみる伝統的小説史論の常套であろうが、いずれにせよ（セルバンテスに大いに負っているにしろ）Fielding が自らを「ロマンス」と区別するとき「リアリズム」を対立させたことは「小説」の自覚として、驚くべき洞察だったといってよいだろう。むしろ、Defoe にも Richardson にも方法的自覚はあったけれど、それが新しい文学ジャンルとしての自覚であったとはいえない。

（ところで、その方法的に自覚された「リアリズム」が作品のなかでどのような形で実現されているかとなるとなかなかむずかしいことになる。リアリズムとはなにかを問題の正面にすえるとなると、おそらく文学全般を相手にしなければなるまいから、とても筆者の能力にあまる問題なのでここでは立ち入らないことにしたい。）

## 2

こうした Fielding の伝統的評価にたいして最近、これと真っ向から対立す

1) Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel*, vol. I, Pt. I, II 'Realism and Romance' (pp. 27-40).

る見解が表明された。ひとつは F.R. Leavis の *The Great Tradition*<sup>1)</sup>。ひとつは Ian Watt の *The Rise of the Novel*<sup>2)</sup> である。Leavis はこの書物の冒頭で Fielding を中心とする 18 世紀小説家のすべてを、彼のいう 'the great tradition' にぞくする 'significant' な小説家ではないとして掃きすてる——

To be important historically is not, of course, to be necessarily one of the significant few. Fielding deserves the place of importance given him in the literary histories, but...<sup>3)</sup>

彼はこのように表題の 'tradition' から予想される「歴史」という概念、「小説」の歴史的発展という概念を全く捨ててしまっており、文学的評価の criterion をもっぱら、自己の critical sensibility におくのである。この態度の正当性をぼくらは否定することはできない。批評とは本来主体的な作業で、主体の活動（このばあいには、作品と自己とが矛盾し闘いあう場そのものが「主体」であり、この意味で「主観」とはことなる）抜きにして文学批評もあつたものではないから。Leavis はこのように文学史的背景を問題外とし、自己の感受性の反応を、それのみを重視する。しかし批評は、たんに、対象への自己の陶酔的拡散ではない以上、そこに批評のいわばものさしがあつて対象の裁断を行わねばならぬ。Leavis のばあいそれは interest in life とか moral preoccupation とか perfection in form とかであつて、そうした条件をそなえた小説家として Jane Austen, George Eliot, Henry James, Joseph Conrad, D.H. Lawrence が及第するわけなのである。いずれにせよ、18 世紀の小説家はことごとく落第、Fielding の意義もせいぜい Austen 誕生の媒介としてなのである。

また Watt は、従来の Fielding 評価を緻密な分析を通して根本的にくつがえし、Richardson にたいする Fielding の優越論を——リアリズム文学としての「小説」として R. が F. より優れているとして——打破した。Watt がそれに先立って冒頭で論じているリアリズム論は、彼の 'philosophical realism' とよぶ empiricism との関聯において解かれておるユニークなものであり、それを基礎にして 18 世紀の小説家を分析する手付きはまことに確かだといわねば

1) F.R. Leavis: *The Great Tradition* (London: Chatto & Windus, 1948).

2) Ian Watt: *The Rise of the Novel* (London: Chatto & Windus, 1957).

3) Leavis, op. cit., p. 3.

4) ibid., loc. cit.: "Fielding made Jane Austen possible by opening the central tradition of English fiction."

ならない。

こうなってくると、Fielding を、やれリアリズムだ、やれ近代小説の誕生だとか呑気なことをいっておれなくなることはたしかなようである。

### 3

ところで、Leavis の非歴史的小説観にたいして Watt はある程度歴史的な観点にたった考察を試みているわけで（むしろ『小説の発生』というその主題がそれを必然にする）、ことに経験論哲学の成立と、小説の、リアリズム文学の発生との間に本質的な相関関係を指摘している点、従来の小説発生論にみられぬ鋭い洞察を示している。ぼくの小説への興味も実は小説の発生にあるわけで、Leavis のあざやかな批評的感受性に感服しながらも満足しえぬのは彼がこの点の考慮を一切省略しているからである、むしろ「小説」の発生に関して明確な答案を用意してあるわけではないし、またその場でもない、ただ Fielding を通して発生期の「リアリズム」がいかなるものであるか、その一端を知りたいとおもっているにすぎない。また「発生」にこだわるのは、とかくジャンルとしての「小説」の運命が云々され、リアリズムの破産、小説形式の解体が問題になっている今日、「小説」とはなにかという根本的な質問を提起することはまず当然といえよう。むしろ具体的作品から離れて小説本質論が展開できるわけではないが、上述の意味からして、およそ小説作品の批評にあたって小説という一文学ジャンルの本質的究明の志向なしにはおそらくその批評は無意味に近くなるのではないか。いずれにせよ、「小説」をその発生点において把握しようという試みは——はたしてその発生形態のなかに発展のあらゆる胚芽が出揃っているかどうかはわからぬが——極めて意味ありといえるだろう。しかしそれが成功するには、社会史や思想史、わけても精神史の助力を必要とするだろう。具体的にいうと、社会史的には、「小説」の発生はイギリス革命後の現象であること、思想史的には、ロックによる市民思想<sup>ブルジョワ</sup>の、哲学的には経験論の成立と期を一にしていること、また文学ジャンルの、また文学ジャンルの「劇」の解体のあとにあらわれたこと——少なくとも以上の各側面からの照射をぬきにして「小説」の発生を正当に評価することはできないだろう。18世紀の小説を論ずるには少なくとも「発生」という視点抜きではあまりに抽象的、無規定的になってしまうのである。本稿は序論的に、小説発生期における人間、「個人」の概念の変質過程を中心に「リアリズム」の問題を考えてみたい。

## 4

ところで「小説」を「劇」や「詩」と異なる別の文学ジャンルとして認識し、「小説」ジャンルの展開過程——発生—成長—衰退——をみるばあい、換言すれば、小説史を貫いてあらわれる小説の「本質」の発展法則を探ろうとするばあい、非常に困難に遭遇する。むしろ「歴史」という概念を否認すれば、あるいは、「歴史」を素朴に、無法則的な、事象の時間的継起とのみ見るならば、小説史、いや一切の歴史の発展法則という観念は意味空虚なものである。しかし「小説」を他の文学ジャンルとは別のものであり、それ自体が歴史的にいろんな形態をとってあらわれている——端的にいて、Fielding は *Finnegans Wake* などの「小説」は夢にも考えることができなかったし、V. Woolf には *Pride and Prejudice* は絶対に書くことができなかったということを認めるならば、そこに「小説」とは一体なにか、「小説」の発展法則はなにかという問題意識も当然でてくるはずであろう。

「小説」が史論的に困難なのは、「小説」自体のもつ本質のためである。「小説」は「詩」や「劇」にくらべて表現形式として自由だからである。極端に言えば、小説の形式という観念自体がナンセンスだろう。小説の形式は個々の作者の自由に属する。(せいぜい「散文」で書かれているというのが共通の形式といえいえるだろう。) したがって表現形式をとらえて史的展開をあつづけることはほとんど絶望である。また、形式の自由性のほかに、テーマもまた種々雑多である。個々の小説作家は、自己の体験から自由にテーマをひきだすことができる。おそらくそれは豊かな人間活動の全領域をおおうことができる。しかもそれをなんらの形式的拘束もなく書きつけることができる。このように本来「小説」は個人的現実密着性をもっているといえるだろう。これに反して、「詩」や「劇」はそれぞれのジャンルに個有の「約束」をもっている。「コンベンション」は文字通り伝統的なもので、「小説」はそうした「<sup>コンベンション</sup>伝統」を介することなく、自由に、個性的に表現することができる。「古典を知らなくても小説は書ける」という意味のことを Defoe はいっているが<sup>1)</sup>、この非伝統性、いわば個体発生性が小説史家の作業を困難にも安易にもするのだ。

こうなってくるとぼくは、「小説は文学の庶子だ」とか「小説は非芸術であ

1) 'It is easy to tell you the Consequences of Popular Confusions, Private Quarrels, and Party Feuds, without Reading *Virgil*, *Horace*, or *Homer*.' [*The Review* (1705); cited in Watt's op. cit].

る」とかいう俗論（あるいは正論）にうっかり賛成したくなるが、小説にも「約束」がないわけではないのである。それは‘actuality’である。どんな大嘘を吐こうと、その「フィクションは細部の真実によって支えられねばならぬ」といったのは Balzac だが、「小説」は actual な detail の裏打ちがない限り小説とはいえない。ここで‘reality’という言葉は故意に使わないのは、「劇」にも「詩」にも reality はあるぞ、というもっともな反論を避けるためで、「小説」にも reality が同様にあるはずである。簡単にいうと「劇」や「詩」はそれぞれ個有の「約束」を通して、その過程のなかで actual なものは濾過されざるを得ず、独自の論理——metaphor の論理——によって reality に到達するだろう。一方「小説」は metaphor を、詩的論理を拒否し、actuality（現実性）を、日常性を、散文の論理にしたがって表現するなかで reality に達するのである。

以上要約して、「小説」ジャンルの特質を一応、形式およびテーマの自由性、非拘束性と内容ないし素材の actuality（現実性）、日常性として規定することができよう。

## 5

ところで、「小説」は以上のべたような意味でさまざまな個人のさまざまな「現実」を読者に提供してくれる。また読者のさまざまな他人の現実への好奇心がこれを促進する。人は「小説」のなかで自己以外の人間の現実生活を、想像的に生きるわけである。己れの人生を一時的にしかいきられないのはなにも18世紀にはじまったことではないが、18世紀人の「小説」への広汎な欲求とそれに応える「小説」の流行とにみられる「他人の現実生活」への興味は一体どこに由来するのだろうか。それは多様化した、同時に平均化した個人生活の発生と無関係ではないはずである。

「小説」のなかの「個人」は、たとえばエリザ朝悲劇の「個人」——Faustus, Hamlet, Macbeth あるいはさらに Duchess of Malfi に比べても、いかに質的に異っていることだろう。「悲劇」の個人たちは、日常的なもの、現実的なものから卓越した、いわば‘prince’のごとき個性であり、「小説」のそれは本来、ブルジョア的な、質的に平均化された個人——民主主義政治において、各個人が、財産・地位・才能等の質的相違が抹殺されて平等に投票権を有するばいの、抽象的な、「一票」としての個人——である。むろん、「小説」における個人が、「悲劇」的運命をたどることもある、いや「悲劇」的な相のもとにお

いてこそ、その個人が抽象性を脱して生きた具体的な個性を獲得しうるはずである。それは反社会的であることによってしか人間的たりえない社会的状況がそこにあるからで、18世紀は、少くともその中期までは、まだ絶対王政への勝利としてのイギリス革命のもたらした自由解放の精神が社会生活のうちにみなぎっていたはずで、その意味で、人間的であるために反社会的になる必要はなかったのである。いづれにせよ、原理的に近代社会の「個人」は質的に平均化された個人であるといえよう。

エリザ朝悲劇の個人（'prince'）<sup>1)</sup>たちは、「個人」の問題は、国家の問題と不可分に結合されている。彼らの個人の悲劇は国家（community）の悲劇として表現されざるを得ないという関係がそこにはある、（いわば「個人」には「国家」が具体的に生きているわけで、そういう関係にある社会を community と定義したい。）むしろエリザ朝社会が、そういう community の理想型<sup>アイデアル・タイプ</sup>だったわけではない。それはむしろ中世にみつかるだろう。エリザ朝はそういう community としての国家がまさに崩壊せんとしている危機であった。あえて臆測をたくましくすれば、まさに崩壊せんとしている communal order を imagination のなかで回復しようという祈願がエリザ朝悲劇作家の心情のうちになかったとはいえないような気がする。これも推測の域をでないが、community という、地縁的、血縁的、直接的、具体的、全面的に結合された人間関係（生活共同体）を崩壊させて、間接的、抽象的、一面的にのみ関係しあう人間関係の新しい社会へと変革させたのは、中世末期より進行していた urbanization（都市化、これは社会のブルジョア化、資本主義化の側面である）、17世紀後半のイギリス革命において頂点に達する変動であるといえるのではないか。18世紀的「個人」は、このように、community を崩壊させ、そこから離脱し、その意味で抽象化された形であらわれてくる個人である。かつての communal な、public な人間から、それを除外した private な人間としての個人である。個人の私室（closet）をもつ個人といってもいい。そして closet と「小説」とが密接な関係にあるのはいうまでもないだろう。「小説」は本来、個人の私室で孤独に読むものであるというばかりでなく、個人の私室を覗きたい興味、privacy への興味なのだ。

こうして18世紀以降の社会では、もはや一個人の運命が国家の運命を左右することはできない。「小説」はせいぜい、いくらかの個人よりなるある人間関

1) cf. C. Caudwell: *Illusion and Reality* (New York: International Publishers, 1955) p. 74.

係の運命をえがくにすぎないのである。

近代社会における「個人」の、「人間」の抽象性、一面性は、反社会的な態度をとるときに、したがって必然的に「悲劇」の形になってあらわれるときに、その抽象性は克服され「人間」としての全体性、具体性を獲得しようとして書いた。しかば反社会的でない「個人」、平均的「個人」は、どのようにして互いに他から区別されるか。家族関係の序列、職業その他の外的特徴を別にして、その「個人」のいわば内部にある人間の特徴としては、‘character’がある。ある「個人」を人間たらしむる特質として‘character’が、他のどの属性、家族関係とか職業とか以上に、主要な指標となるのである。18世紀の、いや‘character novels’の作家たちはすべて人間をそういう視点からとらえたのだ。たとえば Fielding のばあい、‘character’はその人間の全活動をとらえる最も重要な index である——

... since it is a more useful capacity to be able to foretell the actions of men, in any circumstances, from their characters, than to judge of their characters from their actions. (*Tom Jones*, BK. III, ch. 1).

ここでは、‘character’が文字通りうまれつきの改変をゆるさぬもの（たとえば顔形とか身体のプロポーションとかと同じように）として、死ぬまでついてまわるもの、すべての‘actions’のなかに必然的にあらわれるものとして想定されているわけである。人間のこのような、‘character’という面からの照射が、一面的、外面的であり、一面的である点で抽象的であるのは免れないだろう。生活共同体あるいは運命共同体(community)が崩壊したあとに出現した、都市的人間は、このような抽象的な「個人」であって、それは、bourgeois society という概念の抽象性に対応してあらわれているとおもわれる。E. Muir は、18世紀の経済学者が‘economic man’という抽象で人間をとらえた頃、同様に「性格小説」の作家たちは‘social man’という概念を流行させたといい、続けて——The economic man is a pure abstraction, and in the social man, too, there is a touch of the abstract. といっている<sup>1)</sup>。

## 6

さて、18世紀になると、人間は彼上のように変質していった、「劇」形式ではもはやとらえられなくなり、そこに「小説」が要求されてくる。「劇」の論理が成立しにくくなって散文の論理あるいは理性の論理でしか人間を形象化し

1) *The Structure of the Novel*: Hogarth Press, 1954, (pp. 134-5)

えなくなったことでもある。散文では前述したように *metaphor* とか *symbol* とかいう *pre-logic* (前論理的な、しかし詩的な論理) を能う限り排除して、理性的、現実密着的に表現する。こうした散文的論理の勝利はまた、17世紀以来の科学的諸発見にみられる経験的、帰納的、実証的精神——検証可能のもののみを信ずる精神と密接に結びついているのは勿論で、2章でふれた Watt が経験論を「哲学的リアリズム」と呼ぶのもその意味である。18世紀は一般に「理性と散文の時代」とよばれるが、18世紀人は一から十まで真実を要求し、亡霊が舞台に登場することを許さなかった。異常なるもの、理性的でないものを一切認めず、人間は、いわば平均的でおたがいほとんど似ており、せいぜい *character* の差しか残らないのである。

「小説」はそういう時代精神を背景にして、まず事実の記録、事実<sup>に</sup>則した批評という形で出発した。「小説」に先行する形態としての「エッセ」もそれで、「エッセ」は人間のさまざまな活動をはじめとして(政治・社会・宗教その他)外界のあらゆる事象を冷静に、すなわち理性的に観察し、それを散文の論理にしたがって記述する。その際重要なことは筆者の個人的な眼を通して観察し記録するということだ。ここでもその創造行為を貫いているのは経験論の、リアリズムの精神である。そして、「小説」の *character* の先駆といわれるあの想像上の人物 Roger de Coverley が誕生したのもエッセイスト Addison の *Spectator* 紙上であった。「エッセ」と「小説」との親類関係、「小説」に発展する先行形態としての「エッセ」がここにあるわけだが、もうひとつの形態、「喜劇」という形態もあるようにおもう。Fielding が彼自身、小説をはじめる前に達者な *burlesque* 作者であったこと、*burlesque* の終るところで「小説」が成立したこと——こうした点をくわしく分析すると多分ジャンルとしての「小説」の成立過程がはっきり浮かびあがってくるとおもわれるが未だなんともいえない。ともかく *comedy*, *burlesque* を成立せしむるのは *being* と *seeming* との矛盾を見抜く鋭い *satire* 精神、リアリズム精神であり、その前提なしには考えられないし、Fielding のばあい、最後の小説 *Amelia* は別としても、他のすべての小説は、この「喜劇」的手法による人物の矛盾の曝露にみちているのである。

もはや一個人が社会の運命を自己集約的に生きられぬ現実である以上、すなわち、さまざまな個人がさまざまな経験活動を相互独立的に営む以上、「現実」をとらえようとしてもこれを総体的にとらえることはほとんど困難であり、どうしても、いわば各個撃破的にならざるを得ないだろう。そして事実をありの



まま記述しようとするとき、天翔ける「韻文」は失格で、地をはう「散文」が威力を発揮するのもこの点においてなのだ。

ところで、「エッセ」の流行 (journalism の発展にともなう) とならんで、新大陸発見以来18世紀初頭にかけて「旅行記」が流行した。これももちろん、国民生活の多様化にともなう、他人の生活経験への好奇心に他ならないが、「旅行記」の流行は、架空の「旅行記」の創作を刺戟した。世界最初のリアリズム小説といわれる *Robinson Crusoe* がこれで、それは fiction とは信じられぬ程、まさに著者の事実体験の記録だとおもわせる程、「真実」にみちていた。Defoe に敵愾心を抱いていた Swift が同じ「旅行記」の形で書いた *Gulliver's Travels* も、これをそのまま信じて、Lilliput 以下の諸国を探しに出た読者もあったというから、Defoe や Swift の、真実らしさを創作する手腕もさることながら、18世紀の読者の、「旅行記」= 事実という、リアリズムの盲信ぶりもまた大変なものだったようである。

いうまでもなく両作品とも fiction であるが、これを真実にしたてあげるために、入念に細部を積み重ねている。

素朴な意味で<sup>デフォル</sup>真実を保証するのは個々人の生活体験で、体験をその継起した順を追うて記録したものが「小説」の原初形態で、18世紀の小説には、よく 'History of...' というタイトルが附せられているが、この history はわれわれの「小説」の意味で、ある個人の「歴史」を記述したものが「小説」のわけである。こうした、小説の体験記録的性格、あるいは現実密着の性格はジャンルとしての「小説」を考えるばあいほとんど必須の differentia といってよい。

たしかに小説には小説独自の技術があり、Henry James にはじまる一連の小説技術意識は、たとえば Lubbock, E. Muir, E. M. Forster などの専門的研究によっても明らかだが、小説は、いかに技術的に意識化されたにしろ、その作品の豊饒性 (多様な actuality) は、まさに作家の体験の豊饒さに比例し、決してそれを上廻ることはできぬところに、「小説」の体験記録性というプリミティブな性格を窺うことができるだろう。

こうみえてくと18世紀にはじまる数多くの小説作品を小説史的に考察するにあたって、その「リアリズム」の個人的特質を基軸にする必然性がでてくる。

いうまでもなく個人の体験といっても、また生活活動が多様だといっても、

1) たとえ A History of Tom Jones

社会関係のなかにある以上そこには人間関係が成立しているわけで、純粹に特異な体験はなく、体験の現像した形は異っていても、その社会共通の「現実」（あるいはその本質といういみでエトスといってもいい）はあるはずである。それを作品のうちにどのように形象化したか、そのリアリズムの質が異なるにすぎない。むろん時代社会の変動と共にリアリズムの質も変るはずである。たとえば、いかに G. Eliot が Fielding を admire しようとも、両者のリアリズムは明らかにその質を異にしている。「人間」の認識の面からいって、character としての認識から personality のそれへと発展し、それはいわば「喜劇」的リアリズムから「悲劇」的なそれへと変化している、というように。

character としての人間から personality としての人間への発展過程とは、外的に、一面的に、抽象的に規定された人間から（さきに引用した Fielding を想起されたい。彼のばあい character は一方的に the actions を説明しつくすことができる、といっている）、自己と外界との矛盾の場としての主体（したがってそれはそれ自体の精神の運動法則をもっている）としての人間への発展なのだ。それはいうまでもなく、作品中の人間関係の設定をも変動させる。

そして、G. Eliot において personality として人間が認識されてきたについては、19世紀の社会関係、背景的思想の変化を考慮にいれねばならぬだろう。

この発展過程の分析は、「小説」の発生のそれと並んで、Leavis の非歴史的、いや反歴史的小説批評にたいする有力な反論を可能ならしめるものであり、これを外してはならないと信ずる。Leavis が the great tradition に属せしめている 'significant' な小説家たちはすなわち、ここでいう、人間を personality として認識した小説家に外ならないからである。

## あ　と　が　き

以上の立論を実証するためには、具体的に、Fielding なり G. Eliot なりの作品を分析しなければならないのは勿論であるが、ここでは筆者の非力も手伝ってその余裕がない、稿を改めて論ずるつもりである。

Fielding については金沢大学法文学部論集・文学篇7号（1959）で一部論じた。

（1960. 2. 29）